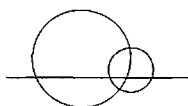


〔学習法 総括レポート〕



東亜同文書院について用語解説と感想

経済学部1年 森田麻子

1 創設者たちについて

東亜同文書院には三人の創設者たちが居ます。まずは荒尾精。愛知県出身で明治になってから軍籍に入り、熊本鎮台に勤務するとき中国に渡りました。その中国の実状に関心を持っていろいろな調査を行い、日本はもっと中国に注目すべきであると提案した方です。いわば同文書院を設立する最初の考えを持った方でしょう。そしてその意思を継いだのが根津一です。そして近衛文麿の父であり初代理事長でもある近衛篤麿。

この三人が主に重要な人物ですが、もう一人欠かせないのが岸田吟香です。彼は英和辞典を作ったりヘボンに目薬の作り方を教えてもらうといった今の私たちの生活に大きく関わることを行った人物です。彼の息子は岸田劉生という有名な画家ですが愛知大学のロゴを作ったのは彼の門下生の高須光治です。このようなところから見て、東亜同文書院は日本の重要な歴史的人物とも関わりがあったことを見る事が出来ます。

2 近衛文麿について

初代理事長である近衛篤麿の息子の近衛文麿は日本史の教科書に載るような重要な人物ですが、実際はどのような人であったのか調べてみました。

1891年（明治24年）10月12日、公爵・近衛篤

麿と旧加賀藩主で侯爵・前田慶寧の三女・衍子の間の長男として、東京市麴町区（現：千代田区）で生まれた。その名は、長命であった曾祖父の忠照による命名で、読みは「あやまる」では語呂が悪いので「ふみまる」とされた。文麿は皇別撰家の生まれであり、父系をさかのぼると天皇家に行き着く。しかし母は文麿が幼いときに病没、篤麿は衍子の妹・貞を後妻に迎えるが、文麿はこの叔母にあたる継母とほうまういかなかった。

父の篤麿はアジア主義を唱え、東亜同文会を興すなど活発な政治活動を行っていた。ところが、1904年（明治37年）に、篤麿は41歳の若さで死去。文麿は12歳にして襲爵し近衛家の当主となるが、父が残した多額の借金をも相続することになった。近衛の、どことなく陰がある反抗的な気質はこのころに形成された、と後に本人が述懐している。

1916年（大正5年）、満25歳に達したことにより公爵として世襲である貴族院議員になる。1918年（大正7年）に、雑誌『日本及日本人』に論文「英米本位の平和主義を排す」を執筆。1919年（大正8年）のパリ講和会議には全権西園寺公望に随行し、見聞を広めた。

その後、1927年（昭和2年）には旧態依然とした所属会派の研究会から離脱して木戸・徳川家



達らとともに火曜会を結成して貴族院内に政治的な地盤を得るとともに、次第に西園寺から離れて院内革新勢力の中心人物となっていった。

また五摂家筆頭という血筋や、貴公子然とした端正な風貌（当時の日本人にあっては長身であった）に加えて、対英米協調外交に反対する現状打破主義的主張で、大衆的な人気も獲得し、早くから首相待望論が聞かれた。1933年（昭和8年）貴族院議長に就任。

（昭和12年）6月4日に、元老・西園寺の推薦の下で、各界の期待を背に第1次近衛内閣を組織した。7月7日に盧溝橋事件をきっかけに日中戦争（支那事変）が勃発。7月9日には、不拡大方針を閣議で確認。7月11日には現地の松井久太郎大佐（北平特務機関長）と秦徳純（第二十九軍副軍長）との間で停戦協定が締結されたにもかかわらず、内地三個師団を派兵する「北支派兵声明」を発表。しかし、その後の国会では「事件不拡大」を言い続けた。7月17日には、1,000万円余の予備費支出を閣議決定。7月26日には、陸軍が要求していないにも拘らず、9,700万円余の第一次北支事変費予算案を閣議決定し、7月31日には4億円の第二次北支事変費予算を追加した。

「Wikipedia- 近衛文麿 - より抜粋

URL///<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BF%91%E8%A1%9B%E6%96%87%E9%BA%BF>」

この後、第二次第三次内閣を形成し、第二次世界大戦へ。そして戦犯容疑をかけられ最期は自殺してしまいます。

3 書院生達の大旅行

創設者たちにより東亜同文書院は開設され学生達の生活が始まるわけですが、その最も注目すべきことはやはり大旅行でしょう。

先の五人の二年間の西域大旅行によって外務省から報奨金として三万円が渡されたため、その三万円で少なくとも三年は学生たちがやりたがっていた中国旅行が出来る様になりました。始まったのは1905年の入学生が3年生の時なので1907年となります。

出発時の写真は今でもたくさん残っています。学生たちはみんなアフリカ探検隊の様です。各チームに一台ずつライカのカメラが渡され、5～6人で一つの班が組まれました。毎年10班あまりが5ヵ月間くらい旅行をしていたようです。

4 大旅行の内容

西域大旅行を含めて、書院生達の旅行はとても大変なものであったようです。山奥の農村部を周ったため道は悪く、歩くのも一苦勞、馬車に乗ればすぐに痔になってしまう。また当時の中国にはマラリア蚊が居たためすぐにマラリアにかかってしまっていた様です。

マラリアは高熱が続く病気ですが、たびたび宣教師に助けてもらっていた様です。また、当時治安の悪かった中国では強盗もたくさん出たため警戒して歩いていたようです。

このように大変な旅だったのですが、書院生たちは本格的に調査をしていました。当時中国に行くといったら大都市を中心に廻るのが主流でしたが、彼らは主に農村部を廻りました。中国のインテリ層は農村部に対して偏見があるので、このような調査はほとんどといっていいほどしません。それに比べて彼らは自分の足で歩き、どこにどのような村があるのか、何を作っているのか、そして農村部の人と直接会話して調査していたので、とても貴重な資料となりました。

5 まとめとその後の愛知大学

まず近代的な中国が芽生えたのは1910年代から

1930年。それが戦後の文化大革命で遮断されて、1980年以降再び資本主義的な色彩が復活してきました。1910年代から1930年代の動きは中国を見る上で一番重要な理解すべき部分となります。そのような面でも東亜同文書院生の残した記録は中国を理解する上でとても重要な価値を持っていることがわかります。書院を継承した形で設立された愛知大学もそれぞれの学部、コースにそれが受け継がれてきていることが分かります。

そのほかにも学籍簿や中日大辞典の刊行など多方面で東亜同文書院の伝統は残っています。愛知大学は日本では中国の大学と協定を結んだ最初の大学となりました。

感想

愛知大学に入った時、現代中国学部があるのは知っていたけど東亜同文書院の名前もここまで中

国と関わりがあることは知りませんでした。調べていくと、受験の時に勉強した近衛文麿の父である近衛篤磨が初代理事長であったりして、自分はとても歴史的に重要なところに入学したんだなあと初めて実感しました。もし今回学習法で調べたりしなかったらこのような事実も知らないで4年間過ごしてしまっていたと思います。東亜同文書院の生徒は学ぶことに生き甲斐を感じて旅をしていたのだと思います。私は娯楽のためにしか旅行に行ったことがないけど、書院生のように自分の知りたいと思うことに時間をかけて旅をするのもいいなと思うようになりました。今の自分は学ぶことに対して意識が低いと思うので、今回東亜同文書院のことを学んだことをきっかけにして自分の意識も変えていきたいです。